「シャープらしさ」を取り戻す

社長 CEO
沖津 雅浩

5月12日に2024年度決算及び中期経営計画を発表し、2週間超が経過しました。発表の内容については既に確認されたと思いますので、本日はこの間の反響を中心にお話しします。

1. ステークホルダーの反響

昨年度は、「3年ぶりに最終黒字を達成」、「売上高・各利益ともに公表値をクリア」、「最重要経営課題のアセットライト化を着実にやり切る」など、期初に掲げた目標を有言実行できた1年となりました。これは社員の皆さん一人一人の努力の賜物であり、改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

こうした成果に対して、決算及び中期経営計画説明会にご出席いただいたメディアやアナリストの方々からは、「2024年度の黒字必達を宣言し、それを本当に実現したことについて、非常にポジティブに捉えている」、「昨年度の一連の取り組みを全てやり切ったことは、かなりすごいことだと思う」など、非常に高い評価をいただいています。

また、同時に発表した中期経営計画に対しても、「シャープの方向性がしっかりと整理されており、わかりやすかった」、「構造改革に区切りをつけ、前に進んでいくというメッセージが非常にポジティブであった」など、出席者から肯定的な感想を数多くいただきました。加えて、お取引先からも、「今後の成長への意気込みが伝わった」、「“目の付けどころ”の復活に期待する」といった、当社へのご期待のお言葉を多数頂戴しています。

一方、中期経営計画の発表以降、当社の株価は低調に推移していますが、これは、2025年度の業績予想が、前年度の特殊要因や米国の関税政策による先行きの不透明さなどを踏まえ、減収減益となったことや財務基盤の課題などが影響しているものと考えています。

こうした株式市場の評価に対しては、今回の中期経営計画の内容をステークホルダーの方々に時間をかけて丁寧に説明し、当社の事業の状況や競争優位性、目指す方向性などについて深く理解していただくとともに、これを着実に実践し、その成果を四半期ごとの業績で示していくことが重要です。

この取り組みの一環として、6月17日にメディアやアナリストの方々を対象とした「事業説明会」を開催し、両ビジネスグループおよび研究開発の戦略をよりブレイクダウンして説明することで、さらなる理解の浸透を図っていきます。

2. 当社の目指す方向性

今回の中期経営計画に合わせ、経営理念・経営信条に沿った新たな指針、Our Mission「誠意をもって人々の日常を見つめ、創意をもって新たな体験を提案する」を策定しました。

この言葉には、社員一人一人が今一度、創業の精神、経営理念・経営信条に強いこだわりをもって事業活動に取り組むことで、他社とは一味違った商品を生み出してきた「シャープらしさ」をもう一度復活させたいという思いを込めています。

社員の皆さんもよくご存じの通り、当社はこれまで、液晶テレビやカメラ付携帯、プラズマクラスター、ヘルシオ、ビューカム、ザウルスなど、数々の独自商品を次々と生み出し、人々の日常に新たな体験を提案してきました。そして、こうした体験は現在の人々の暮らしに深く根付いており、現代社会の“文化”を構成する重要な要素となっています。

勿論、これは当社だけの力で成し遂げたことではありませんが、その一歩を踏み出したのは当社の「誠意と創意」であり、これこそが私が考える「シャープらしさ」です。

これから当社は、DNAである「目の付けどころ」と「特長技術」に加え、さらなる開発の加速や走りながら考える姿勢をより高い次元で身に付けるなど、厳しいグローバル競争を勝ち抜くための「スピード」を一層強化していきます。

この3つを強みに、あなたらしく“暮らす”と共創的に“働く”の二つの領域を中心に、Our Mission「誠意をもって人々の日常を見つめ、創意をもって新たな体験を提案する」を実践することで、シャープらしい新たな価値を次々と生み出していきましょう。そして、シャープを“新しい文化”をつくる会社へと成長させていきましょう。

（中期経営計画資料より抜粋。資料全編はこちら https://corporate.jp.sharp/ir/event/policy_meeting/ ）

3. 最後に

今回の中期経営計画を発表後、社内でもこれに関するアンケートを実施し、短期間であったにも関わらず、3,000名を超える方々に回答いただきました。結果については、改めて、イントラネットに掲載する予定ですが、多くの方が、今回示した「目指す方向性」や「中期経営計画の考え方」を前向きに捉えてくれています。一方、よりブレイクダウンした説明を求める声などもあり、これについては、今後、経営層や各階層の責任者から適切にコミュニケーションを図り、社員の皆さんの理解に繋げていく考えです。

最後になりますが、冒頭にお話ししたように、今回の決算はステークホルダーの方々からポジティブに受け止められたものの、まだまだ信頼回復に向けた第一歩を踏み出したに過ぎません。足元の事業環境は決して予断を許さない状況にありますが、今年度も四半期ごとに着実に業績を積み上げ、何としても2年連続で公表値を達成しましょう。そして、再成長の道のりを力強く歩んでいきましょう。